
魔法少女リリカルなのは ~全てを変えることが出来るなら~

IKA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～全てを変えることが出来るなら～

【Nコード】

N9760X

【作者名】

I K A

【あらすじ】

機動六課は『J S事件』によつて、大切な仲間を失う。その中で生き残った独りの少年『朝我 零』。彼は事件解決後、全てを否定した。そして彼は過去へ飛び、全てを変える。

変えてはいけない過去を変える独りの少年が会つ、今まで知らなかった過去と会つ新たな仲間。その出会いを経て変化していく、彼の想いとは……。今。変えてはいけない過去を変える、少年の戦いが始まる。

全否定が始めるプロローグ

新暦0075年

『古代遺物管理部 機動六課』は次元犯罪者『ジェイル・スカリエツテイ』の手によって消滅の危機に瀕した。

俺、『朝我^{とまが} 零^{れい}』はスターズ隊長『高町なのは』と副隊長『ヴィータ』の二人と共に『聖王のゆりかご』と呼ばれる巨大飛行戦艦の内部に潜入。

内部に発見された『聖王』の正体はとある事件で見つけた少女『ヴィヴィオ』だった。

高町なのははヴィヴィオと戦闘を行うが、今まで共に過ごしてきたヴィヴィオに本気で戦えず、撃墜される。

ヴィータはゆりかご内部にある核の破壊に向かい、核の破壊に成功。

だがヴィータはガジェット・ドローンによって撃墜される。

そこに救助に『八神はやて』が訪れるが、突如活動停止したゆりかごでの脱出に失敗して死亡した。

一方でライトニング部隊隊長『フェイト・T・ハラウン』は別の場所に潜伏していた『ジェイル・スカリエッティ』の逮捕の為に現場に向かっていた。

ジェイル・スカリエッティの発見し、倒したが、逮捕には至らず、戦死する。

そしてFW達は皆、戦闘には勝利するものの、部隊長達の死に絶望する。

そして俺は、聖王のゆりかごでヴィヴィオと決着をつける。

俺は見事勝利し、ゆりかご内部に潜伏するナンバーズのクアットロと言う女性の撃墜に成功した。

そしてヴィヴィオの救出も成功し、事件は集結を迎えた。

それから一ヶ月が過ぎる。

朝我「なのは・・・フェイト・・・ヴィータ・・・はやて・・・」

俺は独り、3人の墓に来ていた。

朝我「ごめん。俺は・・・最低だったな」

俺の頭の中に思い浮かべるは・・・4人と過ごした思い出。

だが・・・俺には後悔していることがあった。

朝我「もつと・・・4人の事・・・いや、皆の事を知っていれば良かった・・・」

俺は機動六課の中でも、孤立していたほうだった。

いや、俺から独りであることを望んでいた・・・っていった方が正しい。

だがなのは達は俺に何度も声をかけてきた。

こんな・・・俺なんか・・・

朝我「もつと皆の事を知っていれば・・・現在は変わっていたのに・・・」

俺は、なのは達に悪い事をした。

生意気な事を言ってしまった。

悪口を言ってしまった。

全部……俺が悪いのに……

朝我「本当は……俺が死ぬべきだったんだ

」！

だから

俺は使う。

朝我
『

』

『
ダ・カーポ
始まりの世界
』

そう言って、俺は全ての始まりに飛んだ。

まずは独りで無くなる事（前書き）

過去改変を始める彼はまず飛んだ世界は始まりの世界。

高町なのはが魔法に出会った時間とその世界。

その世界から変えることで
未来を変えられると信じて
。

魔法少女リリカルなのは　く全てを変え事が出来るなら　く　始ま
ります。

まずは独りで無くなる事

朝我 Side

朝我「・・・ここは・・・海鳴市」

俺は光から解放されると、懐かしい場所へ辿り着く。

場所は地球にある海鳴市の海鳴公園。

朝我「どこまでの時間に飛んだか忘れたな・・・多分、少し飛びすぎた可能性があるな・・・」

そう考えた俺は現在の時間を調べる為に公園を歩き出す。

朝我「変わらないな・・・海鳴公園」

俺はなのと同じように地球出身だった。

だがなのはたちとは長くいたわけではない。

俺はいつも独りでいることを望んで・・・いつも屋上で寝ていたからな・・・

海鳴公園は俺が独りで寝るには丁度いい場所だった。

だから・・・馴染み深い場所で、少し安心した。

朝我「・・・あれ・・・」

公園の隅っこにある木の椅子に座る、独りの少女がいた。

栗色の髪・・・左手で飲み物を持つ姿・・・左利き・・・

朝我「なの・・・は」

彼女はまさしく、高町なのはだった。

だが、小学3年生、つまり魔法に出会った頃の容姿にしては少々幼い。

きっと小学2年生だろう。

公園に桜が咲いている所を見ると、季節は春。

そして俺は巻き戻った時間は・・・『11年前』

つまり俺は、この11年と言う過去を改変して・・・新しい未来を作り出すんだ。

．．．でも、何でなのは独りなんだ？

アリサや．．．すずかがいたはずだが？

なんで．．．

朝我「ねえ、その君」

なのは「え．．．」

俺は勇気を振り絞って、彼女に声をかけた。

なのは「貴方は・・・誰？」

あ・・・っと、この世界じゃ俺の事知らないんだっとな。

しかも俺の姿未だに19歳だし・・・

朝我「・・・君の事を、よく知っている人・・・かな？」

なのは「すーカー？」

朝我「違う。つか、ストーカーな。平仮名じゃない」

いきなりストーカー扱いかよ・・・

なのは「それじゃ・・・誰？」

朝我「だから、君の事を・・・まあ少しだけ知ってる人」

なのは「やっぱりストーカーだよ」

朝我「違うから」

あれ？俺・・・小2の子供に弄られてる？

なのは「・・・なんでもいい」

朝我「え・・・」

彼女が先に折れ、俺に意見を求める。

なのは「私・・・独りぼつちなのだ。貴方・・・友達になってくれる？」

独り・・・ぼつち！？

あの・・・高町なのはが!?

回想

これは、俺が機動六課で見ってきた高町なのはのまとめだ。

高町なのはは19歳でエース・オブ・エースと呼ばれる程名高い存在へと成長した。

その影には、度重なる苦難と困難の連続を乗り越えた事にある。

そしてあの時までのなのはは・・・その存在があるだけで、皆に希望を与えていた。

そう。周りから慕われ、決して独りぼっちなんかではない・・・そんな、皆の中心となる少女だった。

そして今、目の前にいる8歳のなのは。

彼女は自分の事を独りぼっち言った。

朝我「独り・・・ぼっち。実はな、俺も独りぼっちなんだ」

なのは「え・・・」

朝我「ちよつと前に仲間が4人・・・事件で死んだんだ。俺の・・・
唯一の仲間」

なのは「そう・・・だったんだ」

朝我「ああ。だから、君が俺に『友達になって欲しい』って言うって
くれたの、凄く嬉しい」

そう言うと、彼女は笑顔で言う。

なのは「じゃ、友達になってくれるの!?!」

朝我「ああ。君の人生の一番最初の友達は 朝我零だ」

なのは「・・・うん!!!!!!」

こうして俺はなのはと友人になる。

そして俺は夜、寝どころが無いので公園のベンチで寝る。

朝我「まさか・・・11年前のなのが・・・独りぼっちだったなんて・・・」

????「ビックリした？」

朝我「!？」

突如聞こえた女性の声に、俺は辺りを見回す。

だが、そこには誰もいない。

朝我「誰だ!？」

???「ええ〜!?!も、もう私の声忘れたの!?!」

え……この声……あの懐かしい声……まさか!?!

朝我「なのは・・・なのか？」

なのは「ピンポーン！正解！」

そう言うと俺の背後から透けた状態の19歳のなのはが現れた。

朝我「なのは・・・死んだはずじゃ！？」

なのは「うん。だから、朝ちゃんに魔力としているんだよ」

朝我「魔力・・・なるほど、死ぬ前に俺の体内に魔力を入れて、その魔力と俺の魔力を組み合わせてなのはは実体となって現れた・・・
と言うわけか」

なのは「にははは・・・頭良いね、正解」

嬉しくないっての・・・聞きたい事が、山ほどあるってのに・・・

なのは「朝ちゃんの気持ちは分かるよ。けれど、私がこの状態でいるのも限界があつて・・・だから、言える事だけ話すね」

話すこと・・・か。

なのは「まず、私が独りである理由は簡単。私のお父さんが・・・
事故で死んだの」

朝我「な　　　　!？」

なのはが「・・・父さんを亡くしてる!？」

そんなの「・・・聞いたことがない・・・」

なのは「それで、その時期から私のお店『翠屋』は忙しくなっちゃって・・・私を育ててくれる人、私の面倒を見てくれる人はいなかったの」

それって「・・・完璧な孤独じゃないか!？」

なのは「だけど・・・もう大丈夫みたいだね」

朝我「え・・・」

なのはは、安心したように言っ。

なのは「あの頃の私には
もう心配はいらなかなあ〜」
朝ちゃんがいてくれる。だから、

朝我「・・・俺に、なのはを救えるか？」

なのは「ううん。救う必要は無いよ」

朝我「え・・・」

そしてなのはは俺の胸に顔を埋めるように抱きついて言った。

なのは「ただ

傍にいてくれれば、それで良いの」

朝我「なのは……!？」

するとなのはは徐々にその姿を消えていく。

なのは「にやはは……もう、朝ちゃんの魔力が限界みたい」

朝我「は!？」

いや、俺はまだ全然いけるぞ!？」

なのは「私の魔力に合わせてくれる分の魔力が……もう無いの」

なるほど……全ての魔力がなのはの存在維持に使われる訳じゃないのか。

朝我「また・・・会えるよな？」

なのは「え？もしかしてさみしいの？」

にやにやした様子で聞いてくる。

朝我「・・・ああ。正直言って、凄く寂しい」

こんな気持ち・・・初めてだな。

朝我「なのはがないと・・・寂しいよ」

なのは「・・・ごめんね・・・朝ちゃん」

そう言って、なのはは涙を流して姿を消した。

朝我「……でも、俺は負けない。救うんだ」

全てを

そう覚悟を決め、俺は夜を過ごした。

なのは Side

なのは「・・・えへ・・・」

家に帰った私は、やっぱり独りでした。

でも、今日は不思議と・・・寂しい気持ちがありません。

お風呂に入っても、思い浮かべてしまうのは、公園で出会った人。

私の・・・初めての友達。

なのは「明日も・・・また会えるかな／／／／／／／」

そう言っただけは、明日が学校であることを忘れ、朝我さんの事ばかり考えて悶々として朝を迎えます。

まずは独りで無くなる事（後書き）

知った事は、彼女が独りぼっちだったこと。

それは、周りから信頼されて・・・俺も信頼していた彼女しか知らないからこそ知った・・・驚きの真実。

それを知った俺は、ただ近くにおいてあげようよ決意する。

本と一人の少女（前書き）

高町なのはと出会って二日が経った。

その二日で、俺は色んな事実には驚いた。

なのはが独りだったこと。

父を失っていた事。

だとしたら・・・きっと彼女も・・・

そう思った俺は、彼女を探す。

そして知る、新たな真実。

魔法少女リリカルなのは　く全てを変えることが出来るなら　く　始
まります。

本と一人の少女

朝我 Side

朝我「さて・・・次は・・・」

そう言っただけは考えながら街を歩く。

向かうのは図書館。

今から探すのは『八神はやて』

彼女は読書が趣味（決して官能と言う意味ではなく）だったので今から彼女を見つけ、どんな生活をしていたかを知ろうと思った。

というのも、なのはの人生が俺の予想を上回っていたから、もしかしたらはやても・・・と思ったからである。

だが俺は本をあまり読んだりしないので、はやてと話しが合うか物凄く不安だったりする。

朝我「元々勉強とか駄目だったからなあ・・・」

そう。俺は勉強に関しては本当にダメで、機動六課に来たのはリンディ・ハラオウンさんの気遣いあってだった。

その為、俺は戦術を建てて戦うなどは苦手で、戦いながら先を読む
ことしかできなかった。

朝我「この時代に来んだから、少しは勉強しないとな」

そう言って俺は図書館にたどり着き、中に入った。

朝我「うん……っと……」

海鳴の図書館は結構本の量が多く、それだけにこの図書館は広い。
学校の図書館とは大違いだ。

さて、本を探さ……もとい、はやてを探さないと！

そう考えていると俺の後ろから声をかけてくる車椅子の少女が現れた。

???「あの、そこにある本、とって貰って良いですか？」

朝我「え？……ああ、これが」

そう言っただけ俺は4段目に置いてあった本を取って彼女に渡した。

???「ありがとうなあ」

朝我「いや……って……!?!」

この喋りかた……髪色、声。

???「?」

朝我「あの……君は……」

「????」「え?」

朝我「君は

八神はやて・・・なのか?」

はやて「え・・・どうして・・・」

これが、俺が知らない・・・八神はやてとの出会いだった。

はやて「ふえ！？そ、そうなん？」

朝我「ああ」

俺ははやての両親と知り合いと言う嘘についてはやての親戚だと言った。

まあ全て嘘だが、はやての両親は既にこの歳で亡くなっている。

だから失礼ながら、はやての両親を利用させてもらった。

朝我「今日俺がここにきたのは、まあ今のはやての様子を見に来た
つてとこだ」

はやて「そ、そんな・・・心配なんていらへんよ？」

朝我「そうか・・・まあ車椅子で生活してるっただけあって今の状
況を知りたいから、今日は一緒にいていいか？」

はやて「それはかまへんけど・・・朝我さんは大丈夫なん？」

朝我「ああ。問題はない」

はやて「うん。それは、今日はよろしくお願いしますう」

なんか・・・はやてからそんなことを言われるのは初めてだな。

機動六課にいたときは命令されてただけだったからな。

そして俺は車椅子を押してあげてはやての家に向かった。

家に着くと俺は、いきなり衝撃を受けた。

朝我「……………」

そこは、外出していたからと言うのもあるが、真っ暗だった。

はやて「ちよっと待っててなあ、今電気つけるからあ」

そう言って部屋の電気をつける。

だけど・・・まだ暗い。

なんたる・・・なぜか、暗い部屋だと感じる・・・

部屋の電気が暗い？

・・・違う。

窓から日差しが入ってるのに、それでもまだ・・・この家は暗すぎる。

何故だ・・・なぜなんだ・・・

何故・・・なんて寂しい場所なんだ。

はやて「？どないしたん？」

朝我「あ・・・いや、何でもない。悪いな、お邪魔して」

はやて「ええよ。私は一人暮らしやし、家族は多い方がええからな」

多い方って・・・お前、独りじゃねえかよ。

俺や・・・なのはみてえに・・・

なんで・・・なんで笑顔でいられるんだよ・・・

・・・あ、そうか。

分かった気がする。

なんで・・・こんなにこの家が暗いのか。

暗いのは・・・この家自体じゃないんだ。

はやて「はい。これ、お茶や」

朝我「ああ、ありがとう」

本当に暗いのは

君の、^{はやく}その笑顔なんだな。

朝我「・・・馬鹿やろう」

ほんと・・・馬鹿だな。

はやて「え・・・あ／／／／／／／／／／」

俺は車椅子に座ったままのはやてを、そっと抱きしめた。

はやての顔を、俺の胸に埋めるように・・・

朝我「お前・・・どうして隠すんだよ。話してくれよ。甘えてくれよ。泣いてくれよ。怒ってくれよ。そして　　笑ってくれよ」

俺は見たい、はやての本当の笑顔を。

こんな偽物の笑顔で、この世界が明るいとは思わない。

この・・・はやての生きる世界が明るいななんて・・・俺は、思わな
い。

はやて「・・・ごめん。ちょっと・・・うるさくなるかもしれへ
ん」

朝我「構わない。今は、俺しかないからな」

はやて「・・・うん」

そう言って、はやては吐き出すように泣き出した。

全ての悲しみを吐き出すように・・・

全ての理不尽を恨むように・・・

全部・・・夢である事を祈るように・・・

そして全てを吐き出し終わると、彼女は疲れはてて眠りにつく。

はやて「すう・・・すう・・・すう・・・」

朝我「ったく・・・この性格は、生まれつきか」

いつも、自分の中にある感情を外に出さなくて、いざ出すと大きくて・・・

一度泣くといつも大泣きで、笑うと大笑いで、怒るとマジギレで・・・

不器用だから、慣れないから・・・だから大きく感情が出てしまう。

今のうちからこういうことに慣れないから・・・皆から心配されるんだよ。

朝我「良かった。俺がいなかったら・・・このままだったかもしれなかったんだから・・・」

そう言って布団の上にはやてを仰向けで寝かせ、毛布を肩までかけて俺は部屋を出ていった。

はやて」「むにゃ……ふみゅう……」

朝我「またな、はやて。もうお前は

独りじゃないからな」

そう言って、俺ははやての家を出ていった。

だがこの日の夜、八神はやては闇の書から現れる守護騎士達と出会うことになる。

その話は、また時期を改めて話すことになるだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9760x/>

魔法少女リリカルなのは ~全てを変えることができるなら~

2011年10月30日03時07分発行